



# 大きな百合の木の下で

IBARAKI UNIVERSITY NEWS LETTER

THE ELEVENTH NUMBER SPRING 2006 vol.11

茨城大学ニューズレター



2006

● 特集

◎ フィールドは無限

◎ 茨城大学と鹿島アントラーズが提携

● 学生が語る《ゼミ・研究室紹介》

● 広域水圏環境科学教育研究センター紹介



茨城大学  
Ibaraki University



大学の、教員の活動の場は、キャンパスの中だけではありません。多くの教員がキャンパスを飛び出して、様々な活動を行っています。今回の特集では、茨城大学におけるキャンパス外の様々な活動の一端をご紹介します。

# フィールドは無限

## 農学部

山笑う早春にー  
野に学ぶ農学への胎動  
現代GPPプログラム  
「フィールドワーク実習」  
にかける夢

農学部地域環境科学科教授・附属農場長  
現代GPP取組責任者 中島 紀一



フィールドワークの参加者と

「早春の野山で、今年の冬は記録的な寒さでしたが、そんななかでも少しの暖かさをとらえて野山の草木は春の準備を始めます。まず雑木や野草の芽が少しずつ動きだし、続いて地の虫たちも動き始め、それを追ってモグラたちも活動を始めます。三月末から四月の頃、茨城・常陸野の野山は素晴らしい芽吹き季節を迎えます。この風景を「山笑う」と言います。

「山笑う」その少し前、地の虫が動き出す頃に農人は田んぼに出てそろそろと農作業を開始します。まず、田を耕し、苗床に稲の種を蒔きます。そして田んぼには水が張られ、常陸野は

水盆のような風景に変わり、新緑の始まり頃になると田には稲の苗が植えられます。早春の野山に立つと、つくづくと人は自然と共にあると実感されます。そしてその自然とともに生きてきたのが農業です。いま農学は、改めてそんな自然と共にある農業と向き合おうとしています。

「自然と響き合うフィールド農学」

茨城大学農学部のある阿見町は、つくば研究学園都市にも近く、首都圏にあります。周囲は緑豊かな農村です。農学部の構内には二十ヘクタールもの広大な農場があり、大学の外に出れば田畑があり、森があり、その向こうには日本第二の湖である霞ヶ浦が広がっています。この環境が農学部の構成員が共有するフィールドです。いま農学部では、この地元フィールドを舞台として新しい農学（フィールド農学）の教育創造の取り組みが進んでいます。現代の「自然共生型地域づくりの教育プログラム」がそれぞれです。

現代の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(GP = good practice) の略称で、文部科学省による特別プロジェクトです。このプロジェクトでは、学生たちの地域でのボランティア活動を大学の教育システムに組み入れる試みが始まっています。農学部では研究室や実験室で勉強するだけでなく、野に出て自然と交わりながら、自主的な環境ボランティア活動を展開しつつあり、それが教育プログラムとして組み込まれてきているのです。

「地域と響き合うフィールド農学」

阿見町はかつては有数の園芸農業地域でしたが、現在では農業者の高齢化が進み、広大な農地の維持管理も難しくなり、荒れた農地も広がってきてしまっています。利用されなくなり荒廃してしまった農地を保全し、利用を再建しようというのが学生たちの地域ボランティアの主なテーマです。こうした活動を進めるには、地域の自然の仕組みを知らなければなりませんし、地域の農業についても実践的知識を身につけていくことが必要です。自主的活動のためには自主的学びが必要だということです。現代の「自然共生型地域づくり」を大学教育システムとして支援しようとしているのです。

「地域の先達を師として」

現代の「自然共生型地域づくり」フィールドワーク実習として「自然再生活動」「市民とのパートナーシップ形成」「地場産野菜の地域マーケティング」などの分野で実習コースが設定されており、さらに実習経験を理論付けるために「自然共生型地域づくり概論」の授業も準備されています。もちろん農場実習や既存の講義や実験科目もこれらの活動をサポートしていきます。

そこの教育指導者は大学教授はもちろんですが、地元の農家や市民など「地域の先達」も講師陣に加わります。現代の「地域に学ぶ」を基本的なコンセプトにしており、その意味でこのプログラムは学生が社会人として育つための接続教育でもあるのです。



みんなで仲良く田植の実習です



教育学部社会選修のカリキュラムの中に、地理学野外実習という授業がある。四泊五日、調査地で合宿して、フィールドワークを行う実践的授業である。



地理学実習の参加者—旧函館公会堂にて—

受講した学生さんに、「フィールドワークで楽しかった点は？」と尋ねると、「はじめての土地を見ることができた」「聞き取りをした時に、お茶菓子をいただいで嬉しかった」などの答えが返ってくる。逆に「フィールドワークで辛かった点は？」と尋ねると、「聞き取る相手と、うまく話ができなかった」「ミーティングが深夜に及ぶので、睡眠不足になる」など、初体験のフィールドワークは楽しいことばかりではなかったことがわかる。

たしかに、人文地理学のフィールドワークは初対面の方に、農業・漁業・商業などの生業の変遷、生活に関わる様々な組織や信仰など、聞き取りを行うことが多いので、緊張の連続である。博物館で古地図や古文書の写真撮影を行うにも、市役所で統計を拝見するにも、マナーが要求される。

フィールドに行く前には、挨拶の仕方を練習し、主たるインフォーマント（聞き取り相手）へのアポイントメント、関連する文献の読破、聞き取り項目やアンケートの作成など、準備万端整えたはずなのに、フィールドでは予想もしないアクシデントやハプニングがしばしば起こる。「なんで、そんなこと聞くの」「これ聞いて、どうするの」と問いつめられ、追いつめられた学生もいる。

一日の調査が終わると、聞き取りしたことをまとめ、統計を集計・分析し、その成果をミーティングで報告する。報告内容について質疑応答を行い、その後に明日の予定を再確認するなど、毎晩二時過ぎになる。

大学に戻れば、お世話になった方々への礼状書きにはじまり、図表の作成など、報告書の原稿執筆まで一年を要する。これで二単位では割が合わない。とはいっても、報告書が完成すると充実感が込み上げ、卒業して十年経つても忘れない大学生活の貴重な体験となる。公務員になった卒業生の年賀状には、フィールドワークの体験は「人と人とのコミュニケーションを最も必要とする福祉職において、かけがえのない武器となりました」と記してあった。フィールドワークは、実社会で活用できるテクニクである。

フィールドワークの楽しみは、体験した人そ

れぞれに異なるが、これを仕事とする立場からみれば、フィールドワークの醍醐味は、現地では知り得ない新たな問題点に気づき、それを解決することにある。

一例を示そう。昨年、観光地で有名な函館の重要伝統的建造物群保存地区を歩いた。映画やテレビのロケ地にもなる風光明媚な住宅地でもある。教会や寺院の建物に目を奪われがちだが、観光客が行き交う道沿いから一歩脇道に入ると、駐車場の無い家屋があり、空き家も多い。地区内の住民に聞き取りすると、敷地面積が狭いために駐車場が設けられず、転居する若い人が後を絶たないという。有名な観光地の思いがけない一面である。どうすれば良いのか、俄然、研究欲が湧く。フィールドワークは、そこで生活する人々のために、時に語り合いながら、何々学という学問の垣根を越え、様々な方法を考案しては、これを駆使して原因を解き明かし、あるべき方向性を見出すためである。それゆえ、フィールドワークの方法は無限である。



ビデオによる景観の観察・記録  
—旧開拓使函館館支庁書庫にて—